

RCHR 第7回シネマde人権

話題提供:

安聖民

(パンソリ唱者)

寺田吉孝

(国立民族学博物館)

解説と話題提供:

高正子

(神戸大学非常勤講師)

無料

2019年11月30日(土)

大阪市立大学文化交流センター
(大阪駅前第2ビル6階)

第1部13:00~15:00 ホール

第2部15:30~17:00 小セミナー室

上映はホール、座談会は小セミナー室。申し込み不要。

主催 大阪市立大学 人権問題研究センター

(監修) 高正子
寺田吉孝、二〇一八年

『在日コリアンの音楽』

ドキュメンタリー映画上映会
『アリラン峠を越えていく』

国立民族学博物館の音楽公演「アリラン峠を越えていく—在日コリアン音楽の今」(2014年7月20日)から3年かけてドキュメンタリー撮影と編集作業が進められ、昨年度「みんなく映像民族誌」第32集として完成しました。(映画詳細は裏面を参照。)この映画に関わられた高正子さんのガイドで、上映と座談会を持ちます。当日はホールにて第1部として、映画の企画制作に関わった高正子さんから簡単な解説をうけて上映会を開きます。第2部は、小セミナー室に移り、主な出演者のひとりである安聖民さんと、高さんとともに制作にあられた寺田吉孝さんを交えて、映画にまつわるエピソードや、アイデンティティと音楽についてなどのお話をうかがい、参加者を交えて感想交流などをおこないます。安聖民さんから民謡の披露も、いただけるかもしれません。

【話題提供者】

安聖民（アンソンミン）

大阪市生野区生まれ。私立関西大学文学部史学・地理学科卒。1998年 韓国留学。2002年 漢陽大学音楽大学院国楽科修士課程修了。重要無形文化財第5号パンソリ「水宮歌」技能保有者・南海星先生に師事し、2016年履修者認定。2013年 第40回南原春香国楽大典・名唱部にて審査員特別賞受賞。2016年「水宮歌」、2019年「興甫歌」完唱公演。

寺田吉孝（てらだ・よしたか）

ワシントン大学音楽部（民族音楽学科）博士課程修了。PhD。現在、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授。1980年代より、アジアの伝統音楽と欧米のアジア系移民社会の音楽実践の研究に従事している。著書に『音楽からインド社会を知る一弟子と研究者のはざま』（2016年）、編著書に*Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan*（2008年）、*Ethnomusicology and Audiovisual Communication*（2016年）などがある。映像音響メディアにも興味をもち、番組の制作を行いながら、音楽研究や伝統音楽の保全・活性化に果たしうる役割を検討している。制作番組に、『大阪のエイサー—思いの交わる場』（2003年）、『怒—大阪浪速の太鼓集団』（2010年）など。

【解説と話題提供】

高正子（こおちよんじゃ）

神戸大学非常勤講師。大阪生まれの在日2世、在日コリアンの生活文化を研究。「『食』に集う街—大阪コリアンタウンの生成と変遷」『食から見る異文化理解』河合利光編著、時潮社、2009、PP131-146他。

【内容紹介】

ドキュメンタリー映画『アラン岬を越えてゆく—在日コリアンの音楽』は2014年7月20日に国立民族学博物館（日本）で行われた研究公演をきっかけに制作された。研究公演は国際伝統音楽学会（ICTM）傘下の一つである「音楽とマイノリティ」の研究グループが、国立民族学博物館で第7回国際シンポジウムを開催し、そのイベントとして企画された。

シンポジウムの性格を鑑みて、日本最大のマイノリティ集団である在日コリアンによる音楽の多様性を紹介することを公演の目的とし、特に朝鮮半島で育まれた民族音楽を継承する人たちの音楽に焦点をあてることにした。ご承知のように、在日コリアンは日本の植民地支配によって渡日し、解放後も故国へ戻ることができずに日本に居住することになった朝鮮半島出身者であり、その子孫たちである。

在日コリアンは植民地期も日本社会のなかで差別や偏見のなかで生きていたが、解放後のかれらの位置はより悲惨なものであった。1952年のサンフランシスコ平和条約によって「日本国籍」を一方向的に剥奪され、そのことによってすべての社会的恩恵から除外された。それだけではなく、かれらをより苦しめたのは朝鮮半島の南北分断状況であり朝鮮戦争であった。南北分断は在日コリアンを分断し、激しく争う状況を生み出した。このことは、日本社会のなかでの在日コリアンの権利を擁護するなどの生活改善へ力を注ぐ機会が奪われてしまった。従って、在日コリアンが継承する民族文化もまた南北でそれぞれの地域で継承される民族文化を継承することになる。

さて、研究公演で紹介する民族音楽は世界的に知られるサムルノリのような器楽ジャンルをあえて選ばず、言葉を「歌」にして表現している音楽に焦点を当てた。その理由は、1910年の「韓国併合」によって日本で暮らすことになった在日コリアンが、子から孫へと世代が進むにつれ民族語の継承が難しくなるという状況が存在し、言葉にこだわる民族音楽はかれら自身が言語上の困難を克服する活動でもあり、かれらの「言葉」へのこだわりが凝縮されているためであった。

演奏者には、南の民族音楽を継承するパンソリ唱者の安聖民、北の民族音楽を継承する金剛山歌劇団、そして在日コリアンの思いを様々なジャンルの音楽で表現する李政美の3組を招いた。パンソリは在日コリアンがもっとも不得意である言葉を操る芸能である。このような芸能を在日3世が習得するということが自体が大変な作業である。北の民族音楽を極める金剛山歌劇団は小学校から高校まで一貫して民族音楽を学ぶシステムが確立している。そのようなかれらの日常的な努力によって育まれた北の民族音楽を紹介することにした。最後に、南北の民族音楽だけではなく、在日の思いや朝鮮半島の民族音楽を取り入れた李政美さんの音楽世界を紹介することで、在日コリアンの音楽の一側面を紹介しようとした。また、タイトルの「アラン岬」は植民地期に故郷を離れた在日コリアンが、故郷を思いながら苦難を乗り越え、新たな希望を求める岬であり、まさにかれらを象徴する歌でもある。公演のフィナーレでは、3人の歌手が多くの観客が見守るなかアランをメドレーで競演した。声を一つの音色に合わせるのではなく、それぞれが個性豊かな「声」を発しながら、互いを尊重しあうような心地よい「ハーモニー」を醸し出していた。

研究公演を見届けた企画担当者のわたしたちは、幾つかの疑問が残った。かれらが日本社会のなかで在日コリアンとして生きていくこと、かれらにとって民族音楽がどのような意味をもっているのか。民族音楽にこだわるわけは何か。この疑問の答を得るためにわたしたちは2年間に渡ってかれらへのインタビューを試み、1年かけて編集をして完成させた。本映画はかれらの「声」を集めた。かれらの率直な「声」からそれぞれの「声」との対話が行われることを願っている。